

◆八木健選

～佐野典比古・句集『樹木葬』を読む～

句集の感想をオマージュで綴らせていただく。

◆俎板の魚の眼玉の朧かな

板前の目元涼しく鰯捌く

俎板の無実の魚に睨まれる

◆春眠の沖へ漕ぎ出す寝椅子かな

囚われの身となり夢の三尺寝

春眠し寝椅子の前後不覚にて

◆引き潮に足を踏ん張る立夏かな

満ち潮の膝上に来て溺れさう

引き際に足裏を奪ふ夏の波

◆白球を見失ひたる雲の峰

快音や打球は夏の空に溶け

この夏の第何号やホームラン

◆アクセサリ一つ外して薄暑かな

顔洗ふ夏シャツの袖たくしあげ

この坂や汗にコーティングされ上る

◆波音を一枚被せ昼寝かな

犬と子の声が昼寝のBGM

お昼寝の極楽にみて遠音聴く

◆登山帽脱ぎ富士の風入れなほす

夏富士の風にゆるめてシャツの襟

夏帽に入れ吹き下ろす富士の風

◆鉄棒の錆の匂ひに西日濃し

鉄棒の錆黒々とシャツの胸

汗の手に上手にできて逆上がり

◆喪の足の胡坐になりし残暑かな

読経延々膝ぐずり出す彼岸寺

経文を目で追ひすぎる夏の寺

◆威銃雲が二つに割られたる

不意打ちが得意のわざで威銃

雀らは空砲と知る威銃

◆存在の靴音のみの秋の道

靴音は遠から近へ夏の真夜

寒のビル靴音のみに存在感

◆弥次郎兵衛触れて危ふき余寒かな

弥次郎兵衛うららの春を揺れたがり

弥次郎兵衛の他力本願四月馬鹿

◆一閃の海光曳きて初燕

海光を斜め斬りして燕飛ぶ

この家は先祖伝来燕くる

◆牛の尾の叩けばすべる秋の蠅

牛の尾に払われ戻る秋の蠅

この牛の尻にこだわる残る蠅

◆行く秋やぐんぐん縮む砂時計

逝く秋をカウントダウン砂時計

砂時計夏の終わりの時測る

◆開運の酒こぼしたる酉の市

酉の市サンズイつけて酒の市

泥酔の客が迷子に酉の市

◆若葉雨カプチーノの泡溢れさせ

若葉風吹かせてすするカプチーノ

お終いはエスプレッソで夏果てる

◆柵越えて麒麟首伸ぶ薄暑かな

ふるさとを薄暑の先に見る麒麟

身長の伸びて麒麟の暑い夏

◆納豆の糸に絡まる残暑かな

残暑よりながなが糸を引く納豆

残暑とて納豆みたいに絡まれる

◆水すまし雲泳がせて雲に乗り

水に映る雲を乱すや水すまし

水すまし雲映すため水磨く

◆蜜柑剥く一心不乱といふことも

ひと山の蜜柑たいらげ達成感

お嬢さん蜜柑食べすぎ手が黄色

◆月に尾を立てて爪砥ぐ恋の猫

恋の猫月下の屋根を飛び移る

恋猫の戦ふ準備爪磨く

◆水底の石につまづく春の鴨

春の鴨水につまづくてふことも

この川に慣れて不覚の通し鴨

◆冴返る樋の破れを漏るる水

春の水樋の破れを知つてゐる

高きより低きに流れ春出水

◆春泥の乾くてのひら日の匂ひ

黒服の春泥乾けば白くなり

春の泥つけてアリバイなんとせむ

◆近寄りて少し身を引く蝮草

草と知りつつ立ちすくむ蝮草

蛇苺蛇に用心して食べる

◆ 粃殻の深きに林檎眠らせて

粃殻の林檎発掘されてゐる

お林檎は産地直送粃殻つき

◆ 佐野典比古（さののりひこ）

本名、利典。昭和二十五年、山梨県生まれ。平成二十七年、俳句美術館会員。俳味のある句を多数作句。